

広報市民リポーターだより
第9回

農家の強い味方 “普及所”ってどんな所

皆さんご存じのように、最近の農業はまさに暗中模索の状態です。私は自分も農家であるという立場から、今回は市の農林課や農協とともにわれわれ農家を支えてくれている、いわば三本柱の一つ普及所を訪ね、これから二十一世紀に向かってどうしていけばいいのかについて、所長の金忠雄さんからお話を伺いました。

普及所って どんなところ

普及所は、正式名称を「秋田県大館農業改良普及所」といいます。農家でない人たちにはなじみが薄いと思いますが、農家にとってはなくてはならない大切なところなんです。

どういう仕事をしているかというと、「農民が、農業及び農民生活に関する有益かつ実用的な知識を取得交換し、それを有効に応用するために、国からの交付金等によって、県と国とが協同して行う協同農業普及事業

で、農業及び農民生活の改善に関する科学的技術、及び知識の総合的な普及事業やそれに伴う事務等を行う」と、農業改良助長法という頭のイタくなるような法律に書かれてありました。簡単にいえば、農業を技術面だけでなく、農家個々の生活面をも含めて総合的にレベルアップさせるということです。

43歳の普及所

昭和二十三年に始められた普及所の事業、当時は戦後の食料不足の解消が急務でしたが、今では米の生産調整等への対応が重要な問題となってきたいうです。

普及所が仕事を始めて四十三年の歳月を重ねた現在、自分の幼いころの生活と今とを比べてみてみると、また今や秋田県の米の平均反収（十アール当たり）の収量が、常に全国のトップレベルにランクされているのを見ても、この仕事に携わった先人たちの苦労は並々ならぬもので

あったと思われ、本当に感謝の念に堪えません。

21世紀に向けての 課題と解決方法

米の問題はもとより、後継者不足やそれに伴う農業従事者の高齢化、労働力不足、機械等への過剰投資、農地の崩壊、環境

の悪化等、これから二十一世紀に向けて解決しなければならぬ問題は山積しています。これらを一つひとつ解決し、明るい未来を実現させるために一番必要なのは、農家自身の再度の自覚と努力です。そして普及所をはじめ、各指導機関・団体には、情報連絡を密にしてもらい、農家をバックアップしてほしいと思います。

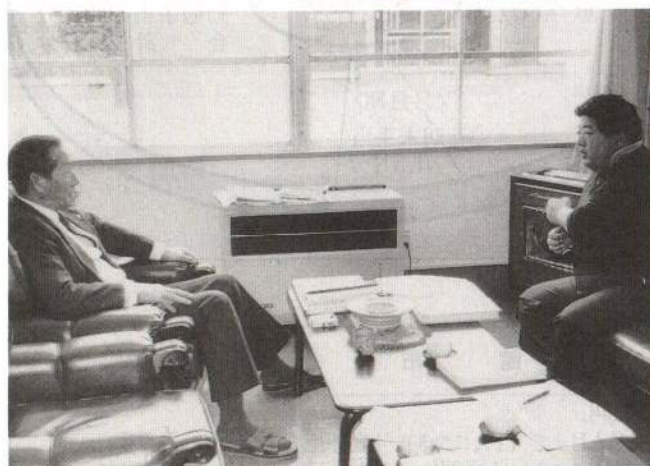
具体的はどうすればよいのかということになりますが、まず各自自治体等に二十一世紀を見通した農業の位置付けを明確にしたらならなければなりません。またそこには、農家の意向と消費者ニーズが十分反映されている必要があります。次に、農業を環境や教育、医療、観光などと合わせ、いろいろな角度から考慮していくことの重要性です。環境問題ひとつをとってみても、将来、農業が果たす役割はますます大きなものになると思います。第三には、農業経営についてです。企業的な農業経営も必要ですが、やはり主流は家族単位の経営だろうと思います。ただし経営感覚は研ぎ澄ましていかなければなりません。また、昔のような農家の過剰労働、特に女性にとつてのそれが、現在の嫁不足、後継者不足の原因に挙げられるのなら、私たち農家もつと時間と気持ちに余裕のある農業にしていかなければいけないでしょう。そして余暇と健康に十分配慮していくことが務めといえるかもしれません。第四には、消費者と農家すなわち生産者が、もつともつと中味の濃い交流をして、お互いに理解を深め、手を取り合うことです。

今回のリポートは、消費者の皆さんの農業に対する理解と、農家のさらなる努力を願って書きました。快く取材に応じてくださった普及所長と所員の皆さんに感謝します。

最後に、偶然一月十七日の取材の日に湾岸戦争が始まりました。一日も早い終結、平和の回復を祈念します。

広報市民リポーター

小林 大樹 (二井田)



▲普及所で取材する小林リポーター
(右が小林リポーター、左が金普及所長)